

物語文学としての『竹取物語』作品論

―異郷考をめぐる複数の視座から―

平田 治之

第一章 昔話考からの『竹取物語』

第一節 『竹取物語』の特徴と成立背景

本論文では、文学・物語文学と異郷との関連性を探ること、『源氏物語』の始原と現在―付 バリケードの中の源氏物語』における藤井貞和の言葉を借りて説明すると、『かたりごと』と『ものがたり』との本来的なちがいを明らかにし、その道程で最終的に異郷の概念の広範な機能の一端を見出す試みを行なっていく。この私の姿勢をまずは示しておきたい。

ところで『竹取物語』に関する、『語られざるかぐやひめ―昔話と竹取物語』の中の次のような高橋宣勝の見解に着目したい。

天人流謫思想のないわが国では、天人流謫譚であるかぐやひめの物語は性格を変えて語られることになった。つまり本来の意味では語られなかったということだ。そしてまた、かぐやひめの物語は昔

話にもならなかった。満足のいく話がほとんどないのである。このように、かぐやひめの物語は二重の意味で「語られざる」ものであったということである

と全体的な結論を述べている。しかしながら、高橋のこの結論に安易に同意してしまうことは些か問題があるように思われる。昔話の側面のみからの考察だけで『竹取物語』を論ずることに危険性をはらんでいるのではなからうか。

ところで、高橋は度々、後に掲げる三浦佑之が『日本説話小事典』の【竹取物語】の項で指摘した『民間説話』の様式から逸脱」や「それぞれの場面の構成も書かれた物語の特徴をも」一つことについて言及はしているものの、西洋の昔話との比較やインド・中国の古代の思想の影響について比較・検討していくうちに、その比較や検討の方がメインになってしまっている。そのため何故『竹取物語』が『語られざる』もの」であるのかが見えてなくなってしまった。本来主眼に置くべきはずのテキストとしての『竹取物語』から、主軸が欧米・アジアと日本の伝承文芸の方に移ってしまっていて、『竹取物語』をテキストとして用いること

によって「語られざる」『竹取物語』という結論をどのように根拠を持たせたかったのかが分からない。

いずれにせよ、本章では主に高橋の行った『竹取物語』分析に対し、かぐや姫に焦点をあてて、かぐや姫によって異郷がどのように展開されていくのかを考察していく。また、最終的にこの検証の過程によって、『竹取物語』の文学作品としての特徴を自分なりに見出していきたい。

ところで、一般的に物語や『竹取物語』はどのように解釈されているのか。参考までに確認しておきたい。ちなみに、『日本説話小事典』には物語について「事実を語る機構を担う様々の説話群に依拠することによって、そのリアリティを大きく支えられはじめて新しく誕生したジャンルであると言つてよい」（『物語と説話』・原岡文子）という説明がある。次に、その「物語」の作品の一つである『竹取物語』自身の説明について『日本説話小事典』にはどのようにされているのか。次のようにある。

物語の枠組みとしては、天女説話や三輪山型説話など、「異郷」から来訪する神と地上の人間との婚姻を語る「神婚説話」の「話型」がふまえられているが、かぐや姫は男たちの求婚を拒否し続けるという点で「民間説話」の様式から逸脱している。それはこの物語の登場人物が説話的な図式化された人物像とは異質な個性をもつという点にも繋がっている。たとえば狂言廻しの役柄の竹取翁や求婚者のうちのくらの皇子・大伴御行などの行動や性格に顕著にみられ、かな物語における描写性の獲得といった面が見事に示されている。それぞれの場面の構成も書かれた物語の特徴をもち、「物語と説話」との表現の差異を考える上でも重要な作品である。（『竹取物語』・三浦佑之）

三浦の説明を振り返って整理してみると、『民間説話』の様式から逸脱し、「物語の登場人物が説話的な図式化された人物像とは異質な個性をもつということ」で、「それぞれの場面の構成も書かれた物語の特徴をもち、『物語と説話』との表現の差異を考える上でも重要な作品」が『竹取物語』ということであろう。また、『日本説話小事典』の【異郷】・（斎藤英喜）の中に『竹取物語』について次のような説明がされている。

『竹取物語』は、月の都から地上に追放されたかぐや姫が、男性たちからの求婚を退けて月に帰還する話。これは羽衣伝説・異類結婚説話のバリエーションといえる。そしてどちらの場合も、最後にはこの世と異郷との往来が跡絶える結末をもつ。ここには異郷との交渉が、この世を不断に活性化する源であると同時に、異郷と接触することへのタブーが共同体を維持する機能となることが見える神（異人）が去ったのちに、地上の女との間に生まれた子供が共同体の始祖となる神婚説話、また異郷へと去ってしまった異類の母への思慕をモチーフとする信太妻伝承、さらには異郷の母をもつ子供が現世の継母から虐待される継子いじめ譚、異郷に戻ることでなくなつた主人公が地上世界をさすらう貴種流離譚など、説話や説話文学の重要な話型が、異郷との関りから生成することが見てとれる。このことより、つまり、【竹取物語】の説明にある「かぐや姫は男たちの求婚を拒否し続けるという」のは【異郷】の説明にある「共同体を維持する」ための「異郷と接触することへのタブー」ということと関連するということなのだろうか。たしかに、『日本説話小事典』には、【流人伝説】の項（佐野正樹）に「罪人として辺境の地や離島に送られたり、あるいは都から追放され各地を流れ歩いた」とある。また、『竹取物語』の

原文の冒頭にも

その竹の中に、もと光る竹なむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光たり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり⁽¹⁾。

とあるように、かぐや姫はこの世の人間の誕生とは思えない登場の仕方をしている。そういう意味では異郷から地上に來た者と捉えることが出来るだろう。しかしこの事実を異人譚や小さ子譚の側面から検討することは難しい。何故なら、異人譚は基本的に自分達の住む共同体にどこから來たのか分からない異人が訪れるものの、その異人は最終的に殺されてしまうというのが一通りの流れである。そして小さ子譚はその名の通り異常な小ささで生まれた者が短期間で成長し、旅に出て鬼退治したり神の衣を織ったりという重要な働きをするという話である。このようにかぐや姫は異人譚のように殺されたわけでもなく、小さ子譚のようにかぐや姫が旅に出たり、機織りをしたりということはないのである。また、小さ子譚は最終的に結婚するという話が多いが、本文中に「かぐや姫のいはく、『なんであふ、さるゝことかしはべらむ』⁽²⁾とあるように、かぐや姫は結婚に対し懷疑的であることが分かる。このように異人譚や小さ子譚の話型にあてはまるような事をかぐや姫は拒むのである。また、異人譚や小さ子譚の側面から検討することの難しさについては高橋も認めていて、これらの視点からの分析が難しい要因としてかぐや姫の昇天を挙げていて、次のように見解を述べている。

かぐやひめは天界で罪を犯したためにこの世に降ろされ、その刑期が満ちたのでまた天へ帰るといふのだ。つまり、かぐやひめがこの世に生まれたのは天界からの〈流謫〉なのである。かぐやひめ誕生

の背後には〈流謫〉の思想があるのだ

とあり、続けて「どうして『かぐやひめ』やその流れを汲む昔話には流謫についての言及がないのだろうか」と疑問を呈している。整理すると、高橋の主張はかぐや姫の昇天の要因は流謫であると解することが出来る。だが、現段階で『竹取物語』という作品の概要や性格を決めるのは尚早である。その理由として、話の構成から『竹取物語』との類似性が疑われていた『斑竹姑娘』という中国の説話の存在が挙げられる。

第二節 『斑竹姑娘』と『竹取物語』

高橋は、『竹取物語』と『斑竹姑娘』の関係について、『語られざるかぐやひめ―昔話と竹取物語』の中でその流れがより詳しく書いていて、『斑竹姑娘』を発見した「百田弥栄子が『竹取物語』との類似に関心を寄せ、君島久子や伊藤清司の指導のもとで両話の比較研究をし、その結果「斑竹姑娘」が『竹取物語』の原典であるという結論に達し」「一時は『斑竹姑娘』の翻案ということを決着がついたかのような感じもあった。だが、その後いろいろな疑問や批判が出され、現在ではひところの勢いを完全に失っている」とある。このように、『斑竹姑娘』がその話の内容から『竹取物語』と類似する話として研究の対象となったものの、時代を追うにつれ、『斑竹姑娘』と『竹取物語』の関連性が否定されるようになり、結局、『竹取物語』の原典は『斑竹姑娘』ではないのではないだろうかという考え方が一般的になったということである。だが、たとえ『斑竹姑娘』が『竹取物語』の原典ではないにしろ、内容の似たこの二作品を比較・検討することは無駄だと言いつけることは出来ない。『竹取物語』

と『斑竹姑娘』のいずれかが影響を受けたにしろ、二作品の類似する部分を比較することで、日本と中国の共通するアジア的な精神・思想というようなものが見えてくるのではないだろうか。そして、『竹取物語』という作品の性格がみえてくるのではないだろうか。

しかしながら、もう少しこの日本での『竹取物語』と『斑竹姑娘』の関係についての研究の流れをふり返っておくと、高橋は『斑竹姑娘』と『竹取物語』の類似は明らかであろう。いや、類似ではなく酷似というべきであろう」とし、類似点については、

竹姫の竹中誕生とあつというまの成長、さらには竹姫が天女であるとされていることなど、かぐやひめを彷彿させるものがあるし、なによりも、求婚者の数とその性格、彼らに課された難題（撞いても割れぬ金の鐘、打っても壊れぬ玉樹、火にも燃えぬ火鼠の皮衣、燕の巢にある金の卵、海竜の顎の下分水珠）が『竹取物語』の難題（仏の御石の鉢、蓬萊の枝、火鼠の皮衣、竜の首の玉、燕の子安貝）と驚くほど一致しているのだ。しかも難題に失敗する次第もよく似ている

とし、相違点については、『斑竹姑娘』がハッピーエンドで終わっていることぐらいである」としている。だが、この相違点について伊藤清司は、

要するにこの一篇の骨子は、竹をもって暮らす貧しい男、いわば一人の竹取りが、竹の中から思いもかけず小サ子を得て、幸福となる話であつて、わが『竹取物語』と大筋においては吻合するといつてよい

としていると、高橋は見ている。また、高橋は「こうした細部にわたる

驚異的な類似」がある場合は『竹取物語』か『斑竹姑娘』の「どちらか一方が相手の影響を受けてきたとみるべきだ」と述べる。

そして、伊藤の場合は『竹取物語』の方が影響を受けたと考えている立場であることを挙げ、

それは「竹中生涯伝承と難題求婚譚、および天人女房説話の複合した物語の成立する公算は、日本の国土よりも、中国大陆において、より高かったとみるのが常識であろう」から

だとし、「かくして『斑竹姑娘』を素材とする『竹取物語』翻案説が誕生した」とみる。その上で、高橋はこの『竹取物語』翻案説に反論する。

むしろ事実とは逆ではないのか。近年に『竹取物語』の方が何らかの方法で中国大陆のチベット大陸のチベット自治州に伝わり、それが『斑竹姑娘』となったのではないだろうか。

今まで、日本での『竹取物語』と『斑竹姑娘』の関係についての研究の流れについて高橋の『語られざるかぐやひめ―昔話と竹取物語』を主に参照してきたが、私自身は『竹取物語』と『斑竹姑娘』のどちらかが原典だったにしろ、そうでなかったにしろ、やはり両作品とも関係はあるだろう。伊藤の『竹取物語』翻案説」か否か、どのような立場に立つにしろ、原典という部分を取り除けば、『竹取物語』・『斑竹姑娘』双方とも影響を受けていたということだけは確認できるだろう。

それでは、具体的にどのような形で日本の『竹取物語』と中国の『斑竹姑娘』の因果関係があるのだろうか。高橋は最終的に『斑竹姑娘』の祖型は、結局天人流譚であった」と位置づけ、『竹取物語』についても、「〈天人流譚〉の物語であり、〈天人流譚〉の構造なくしてはかぐやひめの軌跡は理解できない」とし、『竹取物語』は古代インドや中国の天人

流謫譚に精通したわが国の知識人が、仏書漢籍やわが国の羽衣説話・小
さ子譚・求婚難題譚などの民間伝承を利用して創作した日本版天人流謫
譚である」と一定の定義付けをしている。そして高橋は最終的に、

『竹取物語』におけるかぐやひめの誕生と昇天が天人流謫譚の基本
構造に則っているのはまぎれもない事実である。この天人流謫譚、
天人流謫の思想が中国で生まれたものなのか、あるいは古代インド
の説話を通じてインドから中国・日本へと伝えられたものであるの
か、にわかに判断は下し難い。しかしいずれにしても、『竹取物語』
の基本構造を支える天人流謫の思想が外来思想であることは疑い
ない

と『竹取物語』における流謫とその概要について結論づけている。この
ことから、『竹取物語』が月という異郷を通して、罪を犯して転生して
きたかぐや姫が主人公の「日本版天人流謫譚」であることが分かる。

第三節 小考

今まで高橋の分析を検証してきたが、高橋の『竹取物語』の成立の経
過を整理すると、『竹取物語』はインド発の天人流謫譚の影響を受け、ま
た、その概念が中国やインドからの伝来したものであるということであ
る。そして文学作品としての『竹取物語』という作品の特徴として、様々
な説話などの話型に当てはまらない、独自の性格を帯びる物語文学の作
品であったということが分かり、このことは『語られざるかぐやひめ―
昔話と竹取物語』全体における高橋の主張を裏付けるものである。

しかしながら、そのことが直接起因して「語られざる」『竹取物語』と

いう結論になるという、その部分の因果関係についてはやはり明確に見
出すことが出来なかった。どの話型にもあてはまらないから『竹取物語』
は「語られざる」物語だと断定するのは、文学作品の分析の結論として、
やはり、慎重な見解が求められる考え方であろう。

むしろ、この昔話の話型を受け継ぎ発展させたものが物語なのではな
かろうかと考えられはしないだろうか。高橋が重要視する天人流謫譚や
それにまつわるインドや中国の思想、高橋の指摘する「羽衣説話・小
さ子譚・求婚難題譚などの」昔話の話型を吸収し、それらを活かした新し
い文学の形が物語文学ではなかろうか。

物語文学が発生・成立する一段階手前の物語文学をとりまく状況が昔
話研究者からの視点から見えてきた中で、その手順を踏まえた上でいか
にして物語文学というものが誕生していったのか、こういった成立の背
景に着目しながら古橋信孝・藤井貞和の物語文学考にのぞみたい。ちな
みに古橋や藤井、特に藤井は平安時代期に物語文学の発生・成立を導き
出そうと試みている³⁾。

第二章 物語文学としての『竹取物語』

第一節 古橋の『竹取物語』考

物語文学の発生・成立を平安時代から見出そうとする古橋信孝・藤井
貞和はどのように『竹取物語』を捉えているのだろうか。古橋は『日
本文学の流れ』で『竹取物語』の冒頭に着目し『竹取物語』の書き出しは、
語りのスタイルを意識し、それに基づいて書かれていることをよく示す

もの」だとし、

「今は昔」という時間の提示も、今となつては昔のことだが、と訳されるが、今と昔が等価の關係に置かれた言い方で、現在の秩序を始原に帰つて説明する神話のスタイルとみたほうがいい。この語り出しは、後に述べる、『竹取物語』が全体的に起源譚のスタイルをとっていることと呼応している

と、かたりものとしての物語を受け継ぎ発展させた新たな形の物語文学であることを指摘している。また、「物語文学が元としたのは伝承の語りの文体だと述べたが、神話などの伝承は神々の物語であり、他の伝承も神話と通じる型を持っている。物語文学は神話的な世界を人の心の側から書くとしたものだと考えてみるといい」とし、

『竹取物語』は、かぐや姫の昇天と、天皇がかぐや姫にもらった不死の薬を、かぐや姫がいないこの世に長生きしてもしかたないと、天にもっとも近い山である富士山で焼くということで終わる。この終わり方も、勅使が「兵士どもあまた具して、山へ登りけるよりなん、その山を「富士の山」とは名づけける。その煙、いまだ雲のなかへ立ちのぼるとぞ、言ひ伝へたる」というもので、富士山がいつでも煙を噴き上げている起源譚であり、また富士山という名の起源譚として締め括られるわけで、起源譚という話型に則っている。

しかし、民間伝承の話型に則りながら、この終わり方は物語文学としての宣言とでもいつていい内容を語っている。かぐや姫のいないこの世に長生きしてもしかたがないというのだから、不死よりも恋愛を選んでいのである。神仙思想に触発されて物語文学を書きながら、神仙思想の中心である不老不死を捨てているわけだ(傍線、

筆者に拠る)

と、高橋の昔話研究からの『竹取物語』の考察の限界を示すように昔話と物語文学の違いを明確に分けている。事実、古橋は『竹取物語』の展開には、明らかに神話や伝承を意識的に拒否する姿勢がみられ、「月の世で罪を犯し、追放されて、この世に來た」かぐや姫に「求婚者たちは」「恋し苦しみを背負」い、「帝は死ぬことを受け入れる態度を示す。」「この心の苦悩こそが『竹取物語』が書くとしたものではないか。それはまさに以降の物語文学が書くとしたものだ」と、新たな文学の形である物語文学作品の誕生を『竹取物語』に見出している。ちなみに、『源氏物語』にも物語の生みの親というようなことが書かれている⁴が、『竹取物語』という物語文学の作品の誕生によつて物語文学が隆盛を極めたと古橋が考えていることが改めて確認することが出来る。つまり、『竹取物語』が「物語文学の文体として定型になったのである」。

もう少し古橋の『竹取物語』考について言及すると、『物語文学の誕生―万葉集からの文学史 角川叢書 9』では逆に歌や文体の変遷を中心にしながら、「老いは万葉集の知識人たちの一つの重要なテーマ」で『竹取物語』は結局不老不死を断念する話であつたと時代背景からの『竹取物語』の発生・成立を試みている。続けて、『竹取物語』は老いというテーマと青春の輝きをえがこうとしたことで、万葉集の竹取の翁の歌を受け、和文の物語文学を書くとしたと、歌や文体の変遷からの『竹取物語』の発生・成立にのぞんでいることが確認出来る。

また中国の神仙思想についても、「伝承にみせかけて、あるいは現実を神仙境にみなして、和文で表現する」「『竹取物語』自体が虚構をテーマにし」、「虚構を前面に押し出して書かれている」と見ている。そして、

「地上への執着が『竹取物語』を物語文学としている」とし、

和文は人の心の真実をえがくという役割を担って登場する。この言文一致の思想が地上に執着させた。異郷の女が地上にあらわれ、男たちは心を奪われる。それを地上の側からみれば、破滅しかない。なぜなら異郷の女なぞこの世にいるはずないからだ。言い換えれば、異郷の女がこの世にしていると幻想するのといないと幻想するのは等価だった。いるということが幻想だと気づく。それは観念のレベルにすぎないからだ。現実とは幻想と等価だ。これが言語表現として表出されれば、虚構になる。たぶん『竹取物語』はこの問題に出会っている。竹から女が生まれるなんてありえないが、ありえないと思うことも幻想である。したがって、竹から生まれてもいい。この設定は、異郷の女に偶然出会うより、ずっと嘘っぽい。しかし、逆にいえば、竹から生まれるという設定は幻想と現実とが等価であることを語っていることになるのだ

と、異郷の存在、「異郷の女」の存在そのものが「嘘っぽい」「虚構になる」を指摘している。つまり、「幻想こそが現実を離れる虚構の表現としてあるゆえ」「幻想の世界を否定する必要がある」と、「現実と幻想を等価にみながら、幻想を書かねばならなかった」。そのため、『竹取物語』の「語り手は異郷もこの世も等価にみなす目をもって」おり、「異郷の女を恋してはいけないという教訓譚」を示していると古橋は考えている。

ここで古橋の平安時代からの『竹取物語』の発生・成立を試みを整理すると、昔話の話型やインド・中国などの外国からの思想を受け継ぎつつもそれらと一線を画すかのように発生・発展した新たな文学の形が物語文学であり、その一番最初の作品が『竹取物語』であった。そして『竹

取物語』の登場により平安時代期に物語文学の隆盛が起こった、このように古橋は考えている。昔話の話型を参考にしつつも、作者の意図や作品が生まれる時代背景によって自在に変化することが可能となった最初のきっかけの物語文学作品が『竹取物語』なのである。その意味で物語文学創成期のパイオニアとして『竹取物語』の存在が非常に重要となってくるわけだ。

それでは藤井の『竹取物語』考はどのようなものなのか。

第二節 藤井の『竹取物語』考

藤井は、『源氏物語』の始原と現在―付 バリケードの中の源氏物語』の中で分類した「異郷へさまよい込むばあい」と「異郷から異人がこちらがわへ訪ねてくるばあい」について「説話のパターンにおいて両者はまったく別なのだ」とし、『竹取物語』の竹取の翁は異郷から異人(天女)を迎えた」という「この決定的な相違を無視することはできるだろうか」と、他の説話の型との違いを明確に示すことで『竹取物語』独自の性格を見出そうと試みている。そうすることで「物語文学の発生の秘密がすこしずつ解きほぐされてくる」と藤井は考えている。無論、『竹取物語』が該当するのは藤井の後者の説話の型であるわけだが、これを「異郷から美少女がやってきて竹取の翁に育てられるという説話」と言い換え、

異郷から女性が訪れ、一定の期間を経てまた異郷へ帰ってゆく説話のパターンを、白鳥処女説話、羽衣伝説、天人女房譚、異種婚姻譚など、いろいろ呼び慣わしている。細部の相違をいまは問わない。

竹取の翁の説話は白鳥処女説話と、ずいぶん相違があるにしても、

異郷から天女が訪れてくるという重大な根底において、同一のパターンである。(中略) 物語の書き手が白鳥処女説話型の竹取の翁の説話を素材に採びとることは、異郷を舞台にしないことによって作品の二元化を避け、人間界に舞台をしぼることによって天女に対する人間たちの群像にスポットライトをあて、人間の主題をあざやかならしめるために、どうしても通過しなければならない、不可避の方法であつた

『竹取物語』が他の説話の型と完全に違う型の作品として発生しなければならなかった必然性について指摘している。

また、「かぐや姫を天に迎えるために、天人たちが竹取の翁の館へ来臨する場面で」、「王とおぼしき人が竹取の翁に」「告げ」た言葉に触れ、

この天人のことに拠れば、かぐや姫は天上界で罪を作ったので流された。その淹留の地が人間界であつた。地上的な人間の時間では生活することによって、かぐや姫の罪障があらわれるということである。いま、「罪の限り果て」たので、ふたたび天に迎えられようとする

と罪人として地上世界に流されてきた異人の存在をここから見出し、「人間存在一般についての作者の考えと、地上におけるかぐや姫の存在とをダブラせてみることができる」と罪と異人の関係について考えを述べている。「つまり天上界の犯しを人間界から描いてゆくことが『竹取物語』の採んだ方法であり、「人間界に生きるという刑罰をかぐや姫に課することによって、異郷との緊張関係を張りつづける」、「そうした点で、たしかに人間存在に対する観察と意見とが込められている」と、「犯しの場」

としての異郷そのものを取りあげずに「罪の洗われるつぐないの場としての地上」を描くことを選択したのが『竹取物語』であると藤井は定義している。

一連の藤井の『竹取物語』考を整理してみると、『竹取物語』は説話の型でも「異郷から異人がこちらがわへ訪ねてくるばあい」の方であり、作者は「犯しの場」としての異郷そのものを舞台設定せずに罪人としての「天女に対する人間たちの群像にスポットライトをあて」、「天上界の犯しを人間界から描いてゆくこと」を選択することで「異郷との緊張関係を」生み、「人間存在に対する観察と意見とが込め」たと捉えることが出来る。これを裏付けるように「異郷を取りあつかわなくなる一点から物語文学が可能になる」とも藤井は述べている。

なるほど、『竹取物語』が物語文学として「異質な時間性を説話から受けとった」にも関わらず「異郷を取りあつかわな」いことで「産み出されたと考えることができる」のならば、逆に存在しないことではかえって異郷の存在が見えやすくなるということなのだろうか。

第三章 結論

『竹取物語』は昔話・説話の型や神仙思想などの中国・インドなどの外国の思想を受け継ぎつつも、そこからそれらとは一線を画すかのように新たな文学の形としての物語文学の作品として発生・成立したものであることは、本論文での検証によって明らかになった。この『竹取物語』の誕生が平安時代期の物語文学の隆盛のきっかけとなったのである。

藤井は、『竹取物語』を「異質な時間性を説話から受けとった」にも関

わらず「異郷を取りあつかわな」いことで「産み出された」物語文学の作品であると定義する。また「異郷を取りあつかわなくなる一点から物語文学が可能になる」とも言及を行なっている。これは古橋のいう「現実と幻想を等価にみながら、幻想を書く」くことと何か関わりはあるのだろうか。少なくとも、地上の人間世界の立場から抱く現実世界ではありえないような登場人物がかぐや姫であり、その存在がもたらす現象などが異常であるという点では古橋・藤井の両者の考えは一致している。

『竹取物語』においては、存在しないことでその存在を示すという相反する概念を持つ異郷というものが登場する。この異郷、別の平安時代期の物語文学にはまた別の顔を持つて登場するのだろうか。物語文学と異郷には何か関連性を持つのかもしれない。

注

(1) 『新編日本古典文学全集』(小学館、二〇〇六(第五刷))・『竹取物語』からの原文引用・

(2) (1) 参照

(3) 古橋も藤井も平安時代の物語文学について自負を持っており、古橋の『日本文学の流れ』中の「平安期の『源氏物語』をはじめ物語文学のレベルの高さは同時代の世界文学の水準を遥かに超えている。この日本文学の豊かさ切実さを現代に對置したいと思えてくる」や、藤井の『源氏物語の始原と現在―付 バリケードの中の源氏物語』中の「作り物語、すなわち『源氏物語』を頂点とする平安時代に奇蹟的に不可思議に大発達を遂げた物語文学としての物語」などの発言からも分かるように、『源氏物語』の存在が、なお一層、平安時代期の物語文学の隆盛・価値観の向上を支えたと両

者は考えている。

(4) 『新編日本古典文学全集』(小学館、二〇〇九(第八刷))中の「物語の出来はじめの親なる竹取の翁」(『源氏物語』・「絵合」)。

【参考文献】

- ・藤井 貞和 『物語の方法』 桜楓社 一九九二年
- ・高橋 宣勝 『語られざるかぐやひめ―昔話と竹取物語』 大修館書店 一九九六年
- ・古橋 信孝 『物語文学の誕生―万葉集からの文学史』 角川叢書 9』 角川書店 二〇〇〇年
- ・藤井 貞和 『源氏物語の始原と現在―付 バリケードの中の源氏物語』 岩波現代文庫 二〇一〇年
- ・古橋 信孝 『日本文学の流れ』 岩波書店 二〇一〇年

(ひらた はるゆき・修士課程二年)